

# 教科部会

- ・対象としたテスト      とちぎっ子学習状況調査(平成28年4月実施 小学校4・5年生)  
とちぎっ子学習状況調査(平成28年4月実施 中学校2年生)
- ・学習状況調査の結果【下野市と県平均との比較】  
◎大きく上回っている(5ポイント以上)      ○上回っている(1ポイント以上5ポイント未満)  
ー同じ(±1ポイント未満)  
▽下回っている(1ポイント以上5ポイント未満)      ▼大きく下回っている(5ポイント以上)
- ・4層(A-D)分析      今年度、学力層を4層(25%ごと)に分けて分析  
A層(最上位層)ーD層(最下位層)

## 1 小学校国語

### (1) 学習状況調査の結果

県平均との比較	総合正答率	基礎	活用	話す・聞く	書く	読む	言語
4年生	○	○	◎	○	◎	○	○
5年生	○	○	○	○	○	○	ー

#### 〈考察〉

平均点を県と比較した場合、上の表の通り、本市はほぼ全ての項目で県の平均を上回っており、学習状況結果は良好である。

しかし、内容を細かく見てみると平均点だけの比較では分からない問題点が明らかになった。

学力層(A-D)差	総合正答率	基礎	活用
4年生	52.2	51.8	53.6
5年生	46.4	49.6	31.8

この表は児童をA B C Dの4層に25%ごとに分けた際のA層(上位)とD層(下位)の平均の差をまとめたものである。

これを見ると、4年生では総合・基礎・活用ともに50ポイント以上の大差がついており、また5年生も総合および基礎において50ポイント近い差がついていることが分かる。つまり、平均点では県と比べて良好な結果に見える本市であるが、それは上位の児童が平均点を引き上げているからこその結果であり、実は児童の中で学力に大きな差がついてしまっている、ということになる。

また、4、5年生ともに、基礎の部分でC層とD層の差が最も大きく、基礎的な内容において、実際には十分な力が身に付かずにいる児童が多いことが考えられる。どちらの学年も「言語の知識」では正答率は高くなく、A層とD層との差が大きくなっていることも付け加えておきたい。

このような傾向から、下位の児童に対して、いかに理解を促し、技能を高める指導を行っていくか、また上位の児童を更に伸ばし活躍させる授業の工夫・改善が課題となる。

## (2) 設問別分析 改善策・対策

各学年において達成率の低かった問題、それらに対する改善策・対策は以下の通りである。

### 4年生

観点別に見ると、「話す力・聞く力」「書く力」の平均正答率が50%に満たなかった。4層分析では、問題全体を通してC・D層の正答率が低く、A・B層との大きな開きが見られた。特にD層については、記述式問題に対する無解答率が高かった。題意を読み取り、条件を満たして記述する力に課題が見られる。記述に沿って読み取り、まとめて書くことが難しく、正答条件である内容2つのうち1つしか満たしていない誤答や、文字数の条件を守っていない解答が見られた。

「言語についての知識・理解・技能」に関する問題では、国語辞典の使い方やローマ字の読み、会話文の使い方など、言葉の学習においてD層の正答率の低さが目立った。

漢字の読みで特に正答率の低かったものを次に挙げる。

設問1ー(1) 漢字の読み ウ クッキーを平等に分ける。

《誤答》

- ・「平」を「びょう」と解答しているが、「等」を「どう」と解答していない。
- ・「平」を「びょう」と解答していないが、「等」を「どう」と解答している。

〈考察〉

漢字の読みでは、生活の中であまり用いない言葉について正しく読むことができなかった。日常生活の中でも、いろいろな表現を使って書いたり話したりする機会を充実させるとともに、辞書の活用等を通して児童の語彙を豊富にしていきたい。

◎学習指導にあたって

新出漢字の学習の際、字形と1つの読みだけでなく複数の熟語の読み方の確認や、その漢字を使って短い文を作るなど、活用する学習を通して定着を図っていくことが考えられる。

設問3ー(3) 話すこと・聞くこと

若葉小学校の四年一組では、昼休みに行うクラス遊びについて、グループごとに話し合いをしました。(略)おにごっこに決まった理由を、「～から。」に続く形で十五字以上二十五字以内で書きましょう。

《正答》①全員が参加できる、②運動が苦手な人でも楽しめる、③文末を「～から」としている、④字数制限、以上の内容①②と条件③④を満たしている。

《誤答》

- ・内容①または②のどちらかしか書いていない。
- ・無解答
- ・文末が「～から」としていない。
- ・文字数制限を守っていない。

〈考察〉

話し合いの流れは読み取れているが、理由を表す内容の一部を落として書いてしまう児童が多かった。

◎学習指導にあたって

字数制限のある中で考えや読み取ったことをまとめて書く経験を積ませる。児童の発言だけで理解できていると決めつけず、書いてまとめられるかどうかを見取ることが大切である。必要な内容を落とさず書くことができるかどうかを評価し、内容が不十分な場合には補足させることで、「要点をまとめて書く」力の向上を図りたい。

また、実際の話合いの場面においても、発言の活発な一部の児童だけでなく、全員が話し合いに参加し意見を出せるような工夫も必要である。

5年生

4年生同様、4層分析による学力層別の正答率を見ると、下位層の習熟度の低さが浮き彫りになってくる。例えば、「言語についての知識・理解・技能」では、全体の正答率が74.5%と比較的高い結果を示しているが、4層分析では以下の結果となり、D層の児童の正答率は5割に達していないことが分かる。

〈特にA-D層の差が大きかった設問〉 (％)

	A層	B層	C層	D層
言語についての知識・理解・技能	94.9	81.7	68.9	48.4
設問1-①(ウ)「努める」(読み)	97.1	83.4	69.2	37.8
設問1-②(ア)「幸福」(書き)	83.8	56.7	40.2	14.2
設問1-②(ウ)「勝つ」(書き)	82.4	56.1	42.1	29.9
設問2-②(ウ)漢字辞典の使い方	98.5	82.2	64.5	37.8
設問2-④(ウ)漢字の組み立て	92.6	72.6	61.7	38.6

〈考察〉

上記の分析より、C・D層、特にD層の児童の正答率の低さが顕著である。C層をB層へ、D層をC層へ引き上げる対策が必要である。漢字を各学年で確実に習得させ、日常的に漢字を使う習慣を身に付けさせたい。

◎学習指導にあたって

漢字を用いた短作文を作らせたり、漢字の組み立てに注目させるような問いかけをしたりするなど、漢字の学習方法を工夫していく必要がある。また、漢字辞典については普段の使用頻度が少ないと考えられる。下位層の児童ほど、繰り返し使わせていくことが大切である。授業や家庭学習の中で児童が進んで使える工夫を教師側が意図的に仕組んでいくことが求められる。

次に、5年生の設問の中で、本市正答率1.3%、県正答率0.5%と、最も正答率が低かった問題について挙げる。

設問3 次は西南小学校の五年一組のクラスの話し合いの様子です。これを読んで、あとの問題に答えましょう。

(略)

(3) このあと、田中さんが新たな案として「大なわとび」を提案し、みんなからの賛成を得ました。その理由を二十字以上三十字以内で書きましょう。(ただし丸(。)や点(.)は字数にふくめます。)

〈考察〉

遊びを決める際の条件となる「全員が楽しめる」「教室ではできない、体育館を使う遊び」の2つのキーワードのうち、ほぼ5割の児童が1つの内容しか読み取れなかったことが誤答の一因として考えられる。さらに、本設問は字数の制限があり、限られた字数の中で両方を書くことができなかったのではないかとと思われる。

国語の学習の中では、意見の交換だけで「なんとなく分かった気持ち」になってしまうことがある。つまり、第三者に伝えるために文章で表そうとすると、実はよく分かっていなかったという場面は下位層だけでなく、上位層の児童にも見られる。「分かった気持ち」で終わらせないためには、理解したことを簡潔に分かりやすく文章で書き表す経験を積ませることが有効である。

◎学習指導にあたって

文章を読む際には、記述に沿って読み取る力と、限られた字数に合わせて読み取ったことを「簡潔に」「分かりやすく」まとめて書き表す力を育てていくことが求められる。「記述に合った」読みを意識するためには、「この言葉が入っていれば合格」というような、児童の指標になる「キーワード」を示したり、文型を示したりしながら、繰り返し指導をして書く力を伸ばしていくことが必要である。

## 2 中学校国語

### (1) 学習状況調査の結果

国語の全体的傾向（領域別正答率）

県平均との比較	全体正答率	基礎・基本	思考・判断・表現	話す・聞く	書く	読む	言語
2年生	○	—	○	○	—	○	▽

全体正答率は県平均を上回った。特に「読むこと」の領域においては他領域を上回る結果となった。文章の内容を把握し、適切に答えられていたことから、普段の生活で使われるような語彙に関しては、概ね身に付いていると言えるであろう。しかし、「文法・語句に関する知識」の領域においては、県平均を下回った。この傾向は前年度とほぼ同じである。

### (2) 設問別分析

①「文法・語句に関する問題」—歴史的かなづかいについて理解している—

2—(1)『みたり』（現代かなづかいに直す問題。）

(市内正答率 76.4% 県正答率 85.1%)

#### ◇分析

「ゐ」を「い」に直す問題が出題され、県平均85.1%に対し、市の平均が76.4%であった。その差は8.7ポイントである。誤答の理由には「現代かなづかい」ではなく、「現代語訳」が多かったという分析が出ている。

#### <考察>

「歴史的かなづかい」や「現代かなづかい」「現代語訳」という語彙を生徒に定着させるためにも、「フォローアップシート」を活用して反復練習が必要である。また、普段から古文に親しむ機会を増やしていくことが大切である。

②—1「文法・語句に関する問題」—単語について理解している—

2—(2)『この県には大きなスキー場がある。』（文節に分ける問題。）

(市内正答率 73.7% 県正答率 82.6%)

#### ◇分析

県と市の平均の差は8.9%である。「基礎・基本の定着」に課題がある。誤答の分析では、「文節」ではなく「単語」に分けて答えた者が多い。「文のまとまり」に関しては1年生のときに既習済みだが、その後復習の機会が少なく、「文節」と「単語」が混同してしまったと考えられる。

#### <考察>

「文節」と「単語」の意味の違いを繰り返し確認するとともに、普段から注意して文章を読むよう指導する必要があると考えられる。

#### ◎学習指導に当たって

生徒達は、授業中には理解できていても、その後テストとなると、意味が曖昧になってしまったり、問題文をよく読まずに間違った答えを出してしまったりすることが多い。問題文を正しく理解するために「注意力」と「語彙力」をどのようにして高めるかが課題となる。

「注意力」を高めるためには、今回の設問のような混同しやすい問題に繰り返し取り組ませたり、人の話を注意深く聞く習慣を身に付けさせたりすることが効果的である。

「語彙力」を高めるためには、授業中多読を行うこと、授業外でも本に親しめるような読書指導を行うこと、文章に親しむ機会を増やすことが必要である。言葉がどのような意味をもち、どのような文脈で使われるのかを知り、意味の分からない語は辞書を引いて調べることで、力が付くと考えられる。